テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

さんすべりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

【Ｎコード】
Ｎ４０８４Ｙ

【作者名】
さんすべりあ

【あらすじ】
あたしと、幼馴染の筋肉バカはオンラインゲームの世界にいた。たぶん。しかし高レベル剣士のあたしはいいとして、この筋肉バカはハーフエルフの剣士なんていう無茶なキャラを作ったばかり。レベル１、紙より薄い防御力の相方とどう生き抜けっていうの？

8月24日　プロローグ

コウキがシャーペンをくるくる回している。あたしには出来ない芸当だ。回そうとした瞬間にとんで行くので、うっかりすると人に当たってプチ凶器になる。

くるくる。
くるくる。

シャーペンは回り続ける。問題が解かれる気配はない。

「飽きた。飽きた飽きた飽きた」
コウキはとうとうひっくり返った。バンザイの形に両手を上げつつだったので、横置きにしてあるカラーボックスに手をぶつける。
バカである。あたしの部屋は、殺風景なあんたのと違って物が多いんだから、少しは考えろ。

「いってえ」
「きっと天罰ね。寝てないで問題解けって、神様が言ってんのよ」
「違えーよ。鬼トモにしごかれるカワイソーなオレに、休憩しろって言ってんだ」

コウキは腹ばいに転がり、カラーボックスに片づけられていたパソコンの電源を入れる。
あたしは即座に消しゴムを投げつけた。
「なにやってんのよ。あたしが貴重な時間を割いてやってるんだから、さっさと宿題終わらせて」

夏休み最終週である。
にもかかわらず、この脳ミソ筋肉男は何もしていない。後から苦労すると分かっていてやらないのは、実はこいつマゾじゃなかろうか。

「トモがやってくれよー」
あたしは今度はマーカーペンを投げた。が、勝手にオンラインゲームを始めた彼には、反省の色も勉強に戻る気配もない。

「高一のあたしに三年のあんたの宿題やらせないで。そもそも、受験生がこの状況ってあり得ない！」
「あれ、親から聞いてない？　オレスポーツ推薦決まったから。受験ナシ」

コウキは有名私立大の名前を上げた。こっちは今から頑張ってるというのに、腹の立つ男である。ムカついたので、次々に文具を投げつけてやる。

息切れするまでやったのだが、筋肉バカの筋肉にはばまれた。
ＨＰぜんぜん削れてない。逆にあたしのが減ってる気がする。ほんとムカつく。

あたしは立ち上がると、寝そべったままキャラクター設定をしている男の背中に座ってやった。
「重い。ついでにセクハラ」
はっはっは。動揺している。乗ってるのが女だと思ってない幼馴染でも、多少は効くんだな。一矢報いた気になって、楽しい。
「耳、赤くなってる」

肉のない、ボンキュッボーンな体型から真逆のあたしだからできる芸当だ。色気とか雰囲気とか備わったら、さすがにここまではしない。自衛する。

「うるさい。降りろっての」

赤くなったまま設定を終え、コウキは一生懸命ゲームに集中しようとしている。

「だったら宿題するって言って。あんたのママに頼まれてんの。報酬（めあわせ）は前払いで、もう食べちゃったの……って、似合わないキャラ作ったわね」

あたしはぷぷっと噴いた。

画面にいるのは、金髪美形で背の高いハーフエルフの剣士だ。身長こそ標準だが、ドワーフなみに筋肉ダルマなコウキとは正反対。

人は自分にないものに憧れるっていうけど、まさにソレ。分かりやすい。

「いいだろ」

「よくない。人種と職業が果てしなくミスマッチ。伸びないどころか、すぐ死ぬ」

「いいんだって。トモが宿題終わらせてくれるまでの暇つぶしだし」

「だから自分でやってってば」

「分かんねーもん」

言い合っている間に、ハーフエルフは死んだ。早っ。

コウキがこりずに同じキャラクターでプレイしようとしているので、あたしは回線を引っこ抜こうとした。

その瞬間、視界が真っ黒になった。

8月24日　プロローグ（後書き）

――――もう片方が文章硬いんで、やわらかめのも書いていみようかと思いました。更新はきっと遅いです。

8月24日　1（前書き）

カメな更新ですみません。
とりあえず、今日から三日間は更新します。

8月24日　1

むきだしの天井に、白くほこりがついている。
シーツはざらざらチクチクだ。
横を向けば、大雑把（おおざっぱ）に作られたサイドテーブル。縁にやすりがかけられていないので、うっかり触ると木の破片が手に刺さりそうだ。

明らかに自分の部屋ではない。
あたしは唸（うな）った。
「……」
とりあえず起き、自分の顔や腕を触てみる。現実っぽい感触。床をだんっと蹴ってみる。
下の階からは、怒鳴り声がかえって来た。

落ちつこう。
まずは基本項目の確認だ。
名前、煙月斎（えんげつさい）。性別、男。年齢、６０歳。職業、剣士。レベル、４０１。
ついでに現実のあたしは、関口友である。１６歳、女子高生。

現在地は『スグロ』の宿らしい。見覚えがある……って言っていいのかな。オンラインゲームの街だ。前回ここでクエストをこなして終わった。

記憶に問題はないけど、うん、いろいろ困ったな。
って、すがすがしく笑うのもどうなんだ自分。落ちついているつもりでも、実はパニック状態なのか。

『スグロ』は幸いにして、初心者の拠点の街『キョウ』から近い。

あたしは身支度を整えると、宿を出た。

＊

足の速さは、関口友以上、煙月斎以下だった。
体力や技もそうだ。どうせなら、キャラそのものにしてくれればいいのに。
おかげで、モンスターに出会った時死ぬかと思ったよ！
いつもなら一撃なのに、レベル１の雑魚敵やっつけるのに十分はかかった。
生きてるだけで偉いよ自分！
いや、学校とかいじめ１１０番のお題目じゃないけど、ホントに。

そんなこんなで、『キョウ』の拠点に着いた時にはへとへとだった。
全身汗で気持ち悪かったが、休みもせずに金髪美形の長身を探す。
中にはキャラ設定でかぶったんだろうなって人達もいたが、ハーフエルフの剣士なんておバカなのは一人だけだった。
まあ、当然だ。

しかもそのおバカさんは、他の人達が情報収集につとめているにも関わらず、真剣で素振りを行っていた。なんだその図太さ！
拠点から動いてなかったのはいいが、
「ばか――――っ！」
あたしは跳び蹴りをかました。

完璧インドア派の関口友と違って、ちゃんと跳べた。相手もさる者、剣の柄尻で払われたが、着地も決まった。
「こんな街のど真ん中で刃物ふりまわすんじゃないわよ！」
コウキは慌てて剣を鞘に戻し、謝罪した。

頭を上げてこちらを見る。ぼそりと呟いた。

「うっわ、おネエのじいさんがいる」

居合抜きの一撃が決まったのは言うまでもない。

「いってー」

コウキが脇腹を押さえているが、途中で刃を返して峰打ちにしたので、あざで済んでいるはずだ。レベル４０１と居合抜きスキルがあるからこそできる、見事な手加減攻撃である（自画自賛）。

「だってコウキがバカなんだもん。反省して」

「……もしかしてトモ？」

コウキはあたしのキャラクターを見たことがないので、分からなくて当然だ。

「そうよ」

「嘘だろ……。お前いきなり強くなってるぞ」

「この世界じゃまだまだよ。レベル７００とか見たことあるから。しかも慣れてないせいか、煙月斎本来の力じゃないし」

「でもオレより強い」

言うと、コウキは手近な木の枝を折って素振りを始めた。真剣は他人の迷惑になるが、これくらいなら平気だと思ったらしい。

……やっぱりこいつはスポーツバカだ。

現実世界より劣っていたから（そりゃそうだ。だってハーフエルフのレベル１だ）って、体を鍛えようとするあたり筋金入りだ。

効率は悪そうだが、本人が頑張っているので止めないでおく。

こうして頑張っているコウキを見ているのは、嫌いじゃない。子供の頃はよく試合も見に行った。隙のない横顔はいいと思う。

今の美形顔は見慣れないから、できれば本人のに変更して欲しいけど。

しばらくコウキの横でぼーっとしてから、あたしは立ち上がった。

「ギルドとか掲示板とか見て来る。コウキはここにいてね」

彼は手を止めた。

「オレも行く。お前、絶対しゃべんない方がいい」

「おネエのジジイで何が悪いのよ」

「存在自体が悪だろ。フツーに気持ち悪い」

「うるさい。あんたはここで気が済むまで素振りしてて」

8月24日　2

「うるさい。あんたはここで気が済むまで素振りしてて」
言い置いて、歩き出す。

勝手知ったる街なので、迷う心配はない。
拠点でもそうだったが、冒険者たちは普通にクエストの相談や雑談をしていた。なんで？　まだ巻き込まれたばっかりだよ？　こういう時、ラノベだとみんな右往左往してるはずなのに。

だれか情報収集に走り回ってよー。
魔法や技能を試して下さーい。

心の中で願ってもどうにもならないので、自分でやるしかなかった。
なんなんだこの不幸っぷりは。
ぎぶみーチート能力。せめて現在の情報を教えろ！

思った瞬間、脳裏にぴこんとひらめいた。

【8月24日午前11時59分】
【ログイン数108名】

……。
いや、そうじゃなくて。
もっとこう、使える情報を。

【メンテナンスのお知らせ】
30日0時から6時まで、更新の予定です。

ご不便をおかけしますが、この時間帯はアクセスができなくなります。

だからそうじゃなくて。

せめて友人と話をさせろ。

使えもしない超能力を使うかんじで念じたら、登録してある友人の情報が頭に浮かんだ。

【うさみみ：ログインしていません】

【えとー：ログインしていません】

【６６６：ログインしていません】

ふっ。あんたら、学校であったらただじゃおかない。帰りにケーキおごらせてやるからなあああっ。

心の中でしくしく泣きながら、掲示板に向かう。

何か注意書きが出ていないかと思ったのだが、ムダだった。

ゲーム開始はじめに見た使用上の注意と、クエストしか貼られていない。

しかも掲示板はリアルに壁にうちつけられた板で、クエストは紙に書かれている。

ここまで雰囲気出さなくていいよ。

いっそ電光掲示板にしてほしい。

ゲーム世界じゃなくて、異世界にトリップした気になるからさあ（半泣き）！

＊

他の人がだれも行動を起こさないので、あたしは一人でいろいろ試してみた。
初心者がやってるのと同じ行動なので、とくに注目を浴びたりしない。

いや、声をかけてくれた方がありがたいんだけどね。困った時はおたがいさまって言うし、三人寄れば文殊の知恵ってことわざもある。
みんなで考えたいです。はい。切実に。

なにはともあれ、分かった事がある。
その一、ログアウトはできない。
その二、なぜこうなったのかは分からない。

ファンタジー分類かＳＦかによってこの先の展開が違いそうだが、よくあるストーリーである。取り乱そうにも、テンプレすぎて笑ってしまう。
「はっはっは……はあああ～」
ごめん、やっぱ泣きたいわ。

気をとりなおして、分かった事その三。ここはオンラインゲームの世界観をそのまま表わしているが、それ以外は現実に近い。

たとえばショートカット機能が使えない。

敵も自分も、ＨＰ・ＭＰゲージが表示されない（代わりにいままで戦った記憶みたいなのがあって、特性や弱り具合など、なんとなく分かる。『スグロ』から移動して来た時、体験した）。

アイテム効果の範囲でなら、傷も治った。たぶん生き返りもあり

だと思う。怖いから試せないけど。

能力は、時間がたつに従ってキャラクターの値そのままになった。馴染んだんだろうけど、これに関しては、ちょっと待てと言いたい。

思考がね、関口友じゃないんだよ！

あたしは、自分で言うのもなんだけど、それなりに頭がいい方だ。コウキの親が宿題で頼ってくるくらいにはいい。

なのに今、頑張らないといろいろ考えつかない。これってどうなの！

キャラ設定のｉｎｔ値が低いと、どれだけ高学歴で社会経験を積んでいてもダメなのか。小学生プレーヤーでもキャラクターの値がＭａｘなら、それなりにひらめくのか。

……まあね、スポーツ推薦なコウキがダメ剣士になってたくらいだから、例外はないんだろうけどさ。

うらむよ神様。

世の中にはもうちょっと楽なトリップがあるよね？

ゲームの特性を一人だけ知ってて活かせたり、万能だったり。そんでウハウハ生活できるってやつがさあ。

そもそもこういう時って、どっちか片方は魔法使いじゃないの？

剣士二人だなんて、バランス悪すぎ。

8月24日　3

心の中で神様に思う存分ぐちを言い終えたあたしは、回復薬を大量に買い込んだ。
魔法使いや僧侶が仲間になってくれるまでは、これしかない。
そして、情報収集と買い物を終えて戻ったあたしは目を見張った。
「……あれ？」
コウキは言いつけ通り、黙々と素振りを続けていた。勉強はすぐ飽きるが、運動関係の集中力は常識外れだ。感心する。
それはいいのだが。

なんと！　レベル1だったコウキが、いつの間にか経験値を獲得していた。
嘘だろ。何だお前、フィールドにも出てないのに素振りだけでこれってどういう事。ナニ補正だ。

それとも、あたしのひいき目ってヤツですか？
そう思いたいから、表示が出ないのをいいことにそう感じてるだけ？

「ようやく帰って来たか」
驚きに気付かないコウキは、腕で額の汗をふいて笑いかけて来る。
……ごめん、今美形かもしれないけど、中身があんただと思うとハーフエルフのキラキラ具合が気持ち悪いよ。
「いつまでかかってんだよ。変なのにからまれてないな？」
「ぜーんぜん。それどころか、いやになるくらい普通で日常だった。

１０８人もいるのに、誰もキレてないなんて間違ってる」
「ここに一人いるじゃないか」
「あたし？　失礼な。まだキレてないっての」
あたしは四次元バッグ（正式名称忘れた）から、タオルと着替えをつかみ出して投げてやった。

「もう夕方だし、お風呂行って来て。今日着た服は洗うこと」
拠点は、個室などない代わりに、最低限のものは無償で保障されている（もしかして生活保護？）。窓口で固形食をもらい毛布を借り、雑魚寝部屋の一角に陣取れば、すぐに睡魔がおそって来た。

疲れた。
現実世界の一週間分は動いた気がする。

人の気配で目を覚ますと、コウキがすぐ傍に立っていた。
「トモも入ってくれれば？　いい湯だったぞ」
のほほんとした男から、あたしは服をひったくった。

「洗濯してって言ったじゃない」
「面倒だし、二日に一回でよくね？」
「よくないわよ！　汗臭いっ！」
周りにいる人々から（こいつ女？　それともおネエ？）という視線が向けられ、ムッとする。剣豪の老人キャラなので嫌な事にはならないが、微妙は微妙だ。

「これくらいでイライラすんなって」
気楽な笑顔でどっかりと腰を下ろすコウキには、焦りのかけらもない。
さすが柔道部主将、上の者は鷹揚にかまえるってか。
下級生はそれで安心するのかもしれないけど、あたしはあんたの

とこの部員じゃないの。ぜんぜん安心できません。

だって。

ゲーム経験者のあたしが教えなきゃ、何にも分かんないくせに。
紙装甲のくせに。
レベル1で死んじゃうかもしれないのに。

この鈍感野郎。
いっそニブニブの実を食いすぎて死んでしまえ。

「悪いけど、いっぱいいっぱいなの。イライラは大目に見といて」
あたしは文句を飲み込むと、四次元バッグとコウキの服を持って近くの宿屋へ向かった。

男風呂にも女風呂にも入れないなら、部屋を一時間借りてたらいにお湯を張るしかないでしょう。
別にあたしは男湯でもいいんだけどね。わいせつ物くらい、パパで見慣れてるし（風呂上がりにはパンツをはきましょう）。
けど、見られる側が嫌だと思う。

自分とコウキの服を洗ってから、白髪交じりの総髪にお湯をかぶる。傷だらけの体はいかにも歴戦の武士っぽい。

髪と体を洗ってたらい風呂に入れば、なんだか泣けてきた。
ばしゃんと、勢いよく顔を洗う。
頑張れあたし。煙月斎（えんげつさい）は泣かないぞ。

明日は、コウキが素振りしてる間に仲間を募集しているパーティ

をチェックしに行こう。
知らない人は怖いから避けて来たけど、もうそんな事いっていられない。
たぶん、外に行かないと生活費が稼げない。
コウキのレベル上げをはかるにも、回復魔法が使える人がいないと不安だし。

そんな事を考えながら拠点に帰ろうとしていると、ガラの悪そうな男たちがこっちへとやって来た。
ぶつからないように斜めに進路をとっても、彼らはあたしの前を塞ぐように歩いて来る。

ちなみにガラが悪そうというのは、あたしの勝手な印象だ。キャラクターはきちんとデザインされているので、現実世界なら充分イケメンだ。

「さっき騒いでたろ。トモちゃんだっけ？」
「女の子ー？　何歳？」
「ゲームなんだから、男湯来たら良かったのに。あ、恥ずかしいお年頃かあ」

分かりやすい嫌がらせである。百歩譲って、彼らもこんな状況になってストレスが溜まっていると考えてやってもいいけど、イライラはこっちも一緒。

ああ、我慢できない。
腰を落とした低い体勢から、四次元バッグから直接刀を居合抜き。
一番近くにいた男のわいせつ物にあてて、睨み上げる。
「下種（げす）が。斬り落とされたいか」

煙月斎のロープレだ。声は充分に低い。
さっきまでのソプラノヴォイスが素(す)だが、あたしは、やろうと思えばやれる子なのだ（ん？　言葉の使い方ちがう？）。

あと少し刃を上へ傾ければ、あるいは刀を抜ききれば、大参事になる。
男としては最大の悪夢。本人真っ青。
通りすがりの第三者さえガタブル震え、深くふかーく同情しつつ見守っている。

相手の闘気がマイナスになったところで、あたしは刀を退(ひ)いた。
にっこりと笑う。
「おネエでごめんねー。あたしだって広いお風呂入りたいけど、嫌がられるしぃ。でもぉ、アナタたちが呼んでくれたらいいのかしらぁ。ピチピチ男の子のハダカが見れて眼福ってヤツぅ？」

本気にしたらしい。
やつらはナメクジを飲み込んだような表情で逃げて行った。

それからというもの、あたしが拠点でお風呂セットを手にすると、伝令が走るようになった。一斉に風呂場にいた全員が上がり、半泣きで脱衣所に駆けこむ。

誰もいないならと、あたしは気がねせず拠点のお風呂を使う事にした。すごいよ、広いうえに温泉だ。ワンダフル、グレイト、アメイジーング。
噂が広まって、絡(から)まれることもなくなった。
天国である。

8月25日　1

しかし、問題もあった。

人に真剣を向けたので、拠点のまとめ役に注意された（ＮＰＣは普通に人間に見える）。

パーティ募集には断られ、フリーの魔術師も見つからず、いまや素振りマニアとなったコウキの横で頬杖をついてみる。彼は実戦を想定した動きを取り入れ、前後左右に動きを加えている。

「ハーフエルフの剣士なんてあり得ないと思ってたけど、少しは形になったね」

「まかせろ。これくらい楽勝楽勝」

防御値はあいかわらず紙だが、俊敏さがハンパない。

コウキは昨日、むだな挑発をするなと怒らなかった。

休み空間を確保するためとはいえ、あたしと別行動をとった事を反省していた。そういう男なのだ。

「……ごめんね」

「おう」

「で、考えたんだけど、コウキも逃げ足は速そうだし、あたし達だけで外行ってみようか」

とたんに、コウキが輝かんばかりの笑顔で振り返った。

うわ、キラキラがとんでもない。

「やった。実戦してみたかったんだよ。でもお前ゴーサイン出さな

いしさ。うおぉぉ、いくぜえ」

吠えている。

もしかしてスポーツバカじゃなく、格闘マニアだったのか？

＊

「じゃあ、あそこにちょうどいいのがいるから、やってみて」

街の外、初心者が一番初めにうろつく草原に出て、あたしは１レベルモンスターを指差した。

丸くてぷにぷにしているヤツである。

あたしのキャラクター煙月斎（えんげつさい）には、まったくダメージの通らない最弱の敵。

「ちっちぇー。これ、上から斬ったら剣が地面に食い込むんじゃねえ？」

「それでもいいから。あんたの剣なんて、変なの斬ったら切れ味が鈍るなんて考えなくていい初期装備」

「それもそうだな」

コウキは、農家のおじさんが畑を耕すようにざっくりやった。

この格闘マニアは、モンスターを殺すことに躊躇（ちゅうちょ）しなかった。

いっそ気持ちいいくらいの思い切りのよさで、１レベルモンスターをみじん切りにしやがった。

もう一度言うが、コウキの剣は初期装備のままだ。

ハーフエルフは力が弱いので、軽い一撃しか出せない。俊敏さだけはある。

となったら、回数で勝負するしかない。

結果、みじん切り。
血まみれスライムの出来上がりだ。
コウキが死ななかったからいいんだけど、これはこれでグロい。
「あんたどS？　どこの拷問官よ」
「剣が斬れないのが悪いんだよ。トモ金あるんだろ？　いい武器買ってくれ」
のんきに話していると、死んだと思っていたモンスターが最後の力を振り絞って跳ねた。
コウキに、ぽよんと体当たり。
軽いハーフエルフは簡単にふっとんで――――死んだ。
「ちょっとおおおおっ！」
即行で蘇生アイテムを使うと、生き返ってくれたけどね！
言っていい？
「ちゃんとトドメ刺せバカ元のあんたは筋肉ダルマであたしの体当たりだって跳ね返すかもしれないけど今は究極草食系ひょろ長生物なんだから少しは考えなさいよそりゃあたしも確認しなかったのが悪いけどこんなとこで死なないでよぉぉぉぉぉぉっ！」
絶叫すると息が切れた。
ゼエゼエ言いながら、ぼっさりと（たぶん）残りＨＰ１だったモンスターを斬り捨てる。

オーバーキルだろうが構うもんか。

「トモ」

「なによっ！」

草原に座り込んだままのコウキが手招きしている。

剣を鞘に戻して近寄れば、

「泣くなって」

頭を抱き寄せられた。

「～～～～～～あんたいつの間に近眼になったのっ！　あたしのどのへんが泣いてるんだか言ってみなさいよ！」

あたしは、蘇ったばかりの幼馴染の腹に拳を叩き込んだ。

＊

一応言っておくと、あたしは本当に泣いてない。

半泣きだったかもしれないが、人が見てわかる範囲のものではない。

「ひでー。お前、いきなり性格変わってるぞ」

手加減したので、コウキは地面に転がってはいるが、ケガはしていない。

「現実世界だと、物は投げても殴らないのに」

「リアルでできないことをやれるのが、ヴァーチャルの醍醐味（だいごみ）ってものでしょ」

草原に寝転がるハーフエルフなどという古典ファンタジーな図を見ながら、あたしはモンスターの死体をつついた。体内から石のようなものが出て来た。たぶんこれは売れる物。

「それより、目先の状況をなんとかしようよ。あのね、いい武器買ってもいいんだけど、装備可能なレベルってのがあるの」

素振りと戦闘一回でレベル2になれたかもしれないけど、つかえる剣はまだ無理だ。

「だから、あんた剣士じゃなくて魔法使いに転職しない？　それなら後方にいれるから、レベル低くても安全安心」

「いやだ。格闘こそ男のロマン、血湧き肉躍るって言葉を知らないのか。ブルース・リーは神様だ。北斗の拳は彼がモデルなんだぞ」

やっぱりダメか。

一度死んでも治らない格闘バカがここにいる。

「煙月斎だっけ。トモのも以外に趣味いいよ。塚原卜伝、宮本武蔵、千葉周作。いっそ眠狂四郎」

剣豪シリーズにしては、ずいぶんマイナーな……。

「……じゃあせめて、忍者か弓兵で手をうって欲しいんだけど」

「お。忍者もいいな。トモ、丹波大介とニザールとどっちがあり？」

「ニザールって方で」

それが誰だか知らないけど、金髪ハーフエルフに大介とか名づけるよりマシだ。

とりあえずこれで、毒のついた武器を持たせられる。

隙をついてサクッとやってもいい。
力も防御もないのに真っ向勝負、エンドレスで切り刻む必要はなくなった。
はまりすぎてドン引きできる、どS姿を見せられる事もないだろう。

ホント良かった。

8月25日　1（後書き）

ツンデレ？

8月25日　2（前書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。
実はすごく嬉しいです！（↑力説）

8月25日　2

コウキが無事転職を果たしたので、あたしはクエストを引き受けることにした。

＊

忍者になったコウキは、楽しそうに木々を飛び回っている。
何度も言うが、あんたの防御力は紙なんだから、そこんとこ気をつけろよ。
すでに一回死んでるのを忘れるな。

今回引き受けたクエストは、森林管理官からの依頼である。
詰め所に幽霊が出るそうだ。

ゴーストは、ほんとうは光魔法でやっつけるのが一番簡単だ。
しかし残念ながらうちには魔法使いがいないので、メイン攻撃・あたしが祝福してもらった剣をふりまわす、サブ・コウキが聖水を投げつける、という作戦でいく。

「トモ、詰め所あったぞ」
コウキが木の上で指をさした。
その先には、赤レンガの倉庫がいくつも建っている。ご丁寧に建物の前は大きな川である。
ここは北海道の観光名所か！

心の中でツッコみつつ、森を抜ける。
窓からこっちを見ていた人が、笑顔で手を振ってきた。彼女は一旦ひっこみ、玄関から走って出てくる。
「お待ちしてました。今森林官たちは枝落としに出てるんですけど、夕方になったら帰って来ますわ。どうぞ中でお待ち下さい」
かわいいＮＰＣのお出迎えに、あたしとコウキは手を取りあって喜んだ。

だって、このひと小人だよ！
ドワーフほどごつくなくて、片手にサトイモ（？）の葉をもって日傘にしている。いわゆるコロボックルってやつだ。さすが北海道、いいゆるキャラをもってるな。やるじゃないか。

閑話休題（それはさておき）、クエストの基本は情報収集である。
「幽霊って、いつ頃から出るようになったの？」
「今年の春くらいからですわ」

お茶を出してくれた小人は、テーブル横の脚立の上にちょこんと座った。彼女はここで、人間の森林官の世話をしているそうだ。
「春に新人の森林官が、倒れてきた木の下敷きになって亡くなってしまったんですの。みなさん、その彼の幽霊だとおっしゃってますわ」
「ふうん」

「夜の１２時になると出てきますの。場所は決まってなくて、倉庫のどれかに、こう、ふよふよと」
小人は胸の前に両手をたらした。

「見たの？」
「見ましたわ。幽霊さんが出はじめて何日かたった頃、みんなで確認に行きましたの。手分けして全部の倉庫に潜んで。そうしたら、がさって音がして、そっち側を見たらいましたの！」

……あれ？　今何かがひっかかったけど、何だったかな。
たぶん関口友だと分かるんだろうけど、煙月斎（えんげつさい）のｉｎｔ値が！
ｉｎｔ値がじゃまをするうぅぅぅ！

「うー」
考えても思いつかないので、諦めよう。
いざとなったら斬る。その方向で（おい！）。

「ユーレー……オレは会いたくないなあ」
「慣れれば平気ですわ。ぜんぜん怖くありませんもの。ただ、困ったことがありまして」
「何？」
「幽霊さん、出るたびにリグレ鉱石を消費してしまいますの」

なんですか、その特殊な幽霊。

リグレ鉱石は、きのこの形をしている高値で取引される鉱物だ。
決まった木の周りに、丸く円を描くように見つかるので、別名マツタケ石。
フェアリー石サークルという可愛らしい（？）名もあるが、みんなマツタケ石と呼ぶ。

ネーミングセンスはともかく、どれだけ貴重で高価かは分かってもらえたと思う。

市場では一個一万イェンで流通している。

「だから報酬高かったんだ」

場所も人里はなれた森の中、力押しできないのでモンスターとも相性が悪い。なのにあたしがこのクエストを引き受けたのは、報酬が破格だったからだ。

なぜだろうと引っかかっていたが、それなら納得だ。

大切な臨時収入を消費して出て来る幽霊なんて、元仲間でも困る。

夕方、仕事から戻ってきた森林官たちにも話をきいた。

亡くなった新人くんは、他人思いのいい奴だったらしい。思い出し、ついでに感極(かんきわ)まった森林官たちは、男泣きに泣いていた。

「おれが悪かったんだあああっ。おれがあの時先に行っていなければ！」

「お前のせいじゃない。オレも悪かった！　あの日弁当を忘れて取りに戻らなければっ」

「ああっ、それなのに俺たちはまたあいつを殺してしまうのか！」

……クエストの演出とはいえ、暑苦しいＮＰＣたちである。こいつらも小人にしてくれればマシだったのに。

君たち分かってるかなあ？

その新人くんの幽霊を殺すのは、あたしとコウキなんだよ？

にっこり笑ってやれば、森林官たちはざざっと部屋の隅に逃げた。

何がそんなに怖いんだか。

あ、おネエのジジイだからか。

ひとのやる気を減らした森林官たちには、以前と同じように倉庫を見張ってもらう事にした。

夜、彼らはちびちび酒を飲みながら、複数ある倉庫の前に手分けして陣取った。

「中には入らないんだ」

「ええ。煙月斎(えんげつさい)様が、同じようにとおっしゃったので。あの時はまだ怖くて、こうして窓から覗(のぞ)くだけでしたの」

小人の娘さんは、あたし達と一緒に中間地点にいる。

後ろにはきれいな川、空には満月。

森林官たちも、まったり月見酒としゃれこんでいる。

気持ちは分かる。ビルだらけの空しか知らないあたしも、最高の景色だと思える。

しかし残念ながら、クエストの最中なのだ。

川と月ではなく、倉庫を見張っていなければならない。倉庫の後ろの森は暗く深く、幽霊くらいいくらでも湧いて出そうだ。

「なあトモ」

「なに」

「なんでオレ達クエストなんてしてんだ？　現実に帰る方法、探すのが先だろ」

コウキが珍しくまともな意見を出した。

ハーフエルフ補正でも入って、脳ミソから筋肉が落ちたのかもしれない。

小人の娘さんは、礼儀正しく聞かないでいてくれている。
クエストに関係ない話だと、冷たい目を向けたりもしない。
だから、あたしは倉庫を見ながら呟いた。

「……だって、みんな普通にゲームの続きやってるみたいなんだもん」

トリップしたのは、真夏の昼、しかもご飯時である。時間帯が悪くてログインしているのは百人程度だった（なにせマイナーだからね）。

だが百人いれば、あたしより上のプレーヤーだっているはずだ。
レベルだけじゃなく、判断力や洞察力に優れた人がいると思う（ｉｎｔ値の呪いを受けてないことを祈る）。
そんな人たちが何も言わないなら、あたしが騒いだってどうしようもない。

「たぶん、すぐに帰れるような状況じゃないのよ。原因不明で、誰も、どうしたらいいのか分からない。下手に騒いで絶望をあおるより、こうして気を紛らわしてた方がいいでしょ」

原因究明は、最前線で苦悩している主人公クラスの人がやると決まっている。
あたしみたいなその他大勢は、日々の生活を続けるしかない。

「お前、よく平気でそんな事言えるな。怖くないのか」
「煙月斎は泣かないからね」
「そっか。昨日のうちに泣いてふっ切ったのか。ならいいけどさ、

次泣きたくなったらオレに言えよ。ええと、……つまり……ひとりで我慢す」

照れくさげに鼻の横をかく男。

あたしは無言で居合抜きを披露(ひろう)した。

8月25日　2（後書き）

時間経過について。
朝　試しでモンスター退治　→昼　転職&掲示板チェックでクエスト引き受け　→午後三時頃　森に到着　となっています。

8月25日　3（前書き）

たぶんこのまま最終話まで毎日更新できると思います。
よろしくお願いします。

8月25日　3

「あっぶねえ！」
手加減をしたせいで避けられてしまった。
コウキは連絡用の鐘楼（しょうろう）の上に乗って、構（かま）えをとっている。この身軽さと素早さはイイ線をいっている。

「泣いてない！」
「分かった！　分かったから、刀振り回すなって。これでユーレー出る前にケガしたら、ただのアホだろ」

言い合っていると、指笛が鳴った。
「森林官からの合図です。右から二番目って言ってますわ！」

小人の娘さんの指示を受け、意識を切り替えたコウキが跳び出した。
あたしもすぐに走り、倉庫のドアを斬り開ける。
森林官がオーノーって顔をしていたが、扉の一枚くらい大目にみてほしい。

ドアの近くには幽霊はいなかった。窓のところで体を斜めにして立っている。
胸の前に手をたらすなんて、いかにもな幽霊っぽりだ。
跳び、刀の柄に手をかける。

でも、幽霊の瞬間移動よりあたしの方が早い。

一振りで斬れる距離だった。
森林官たちの泣きごとさえ聞いてなかったら。

『いい子だったんだ。幽霊になっても、おれたちには被害はなかったし』

ああもう。情で手元が狂うなんて、煙月斎（えんげつさい）の名が泣くってば！

あたしは一閃（いっせん）させた剣を鞘（さや）に収め、ふたたびタイミングを測る。

幽霊は、まだ若い男だった。

彼はぼんやりとした青白い姿で、まだ胸の前に手をたらしている――――？

違う。上がりきらない手で、指をさしている。

奥を。

「トモ、捕まえたぞ！」

まさに幽霊がさしている方向から、コウキの声が上がった。

気絶させた男を、うんうん言いながら一生懸命ひきずってくる。

……ああそうだね、あんた体力も腕力もない１レベルハーフエルフだもんね。

「というか、あたし達の目的は幽霊退治なのに、なんでコウキは人間を捕まえようと思ったわけ？」

「……あれ？」

「あれ、じゃないでしょ！」

あたしはコウキを軽く殴ってから、男をドアの向こうへと放り投げようとつかみ上げた。

指先に、ごつごつした感触。

「？」
探ると、男の懐（ふところ）からリグレ鉱石が転がり落ちた。
「なるほどね。コウキ、こいつ縛りあげちゃって」
頼み、彼と幽霊を置いて奥へと走る。

他に人はいない。

あるのは、通用口。
あたしは外に出た。
気配は、近くに一つ。遠くに一つ。あとは分からないが、何人いてもおかしくない。

「逃げられると思わないでよね」

コウキが捕まえた男は、リグレ鉱石を盗んでいた。
どうりで、実体のない幽霊の出現時に小人の娘さんが音を聞いているはずだよ。

幽霊が出現するエネルギーとして必要なんて、特殊要件だと思ってたけど。
前提が違うんだ。
それは勘違い。小人の娘さんが言っていたような、消費ではない。

幽霊は、犯行を知らせようとしていただけ。

亡くなった新人くんは、本当にいい人だったんだな、と思う。

だったら幽霊退治は、彼を斬らなくてもできるはず。
犯人グループを検挙し、この詰め所を守れれば、ちゃんと成仏し

てくれると信じる。

あたしは暗い森の中を走った。

――――後ろに気配。

振り向きざま、上からかかって来た忍者を居合抜きで斬り伏せる。

手加減はしなかった。

だって本気じゃないと、ゲーム初心者のコウキにさえ逃げられるんだもん。

命がかかってるこの場で、手抜きなんてできない。

それでも、頼むから生きていて、と思う。

敵だからモンスターと一緒のはずだけど、気持ち的に違うんだよ！

運営会社もデザイナーも、血とか肉とか、こんなにリアルに作りこまなくていいから！

大手と違ってマイナーなんだから、しょぼくていいんだよぉ（泣）

気持ちは半泣きだが、腕は飛んでくる矢を斬り落とす。

その辺に犯人の一人がいるんだけど、どこから射てるのか、暗過ぎて見えない。

暗視野の射手って卑怯だ。

こっちは近づかないと見えないし斬れないってのに。

走りながら矢を払っていると、横を何かが飛んで行った。

前方で、いきなり人が木から落ちる。

「トモ」

後ろからは、聞き慣れた声。彼が投げた毒ナイフが、射手に当たったのだ。
射手の気配が消えた。「稀に即死」効果が発現したのだろう。
それはいいのだが。

「コウキ？　なんで来るのよ！　つーか、それ以上来るな！」

言いながら、あたしは全身で気配を探った。
まだどこかに敵がいる気がしたが、場所の特定はできない。察知できないくらい遠いからならいいが、相手が魔法やスキルを使っているからだとしたら、ものすごく嫌だ。

「危ないじゃない。今すぐ倉庫に戻って！」
範囲魔法を警戒して、側にはいかず指示する。
しかしコウキは、暗闇の中でため息をつきやがった。

「トモ、過保護。」

「なんだと～～～～っ！」
今日ぷにぷにした1レベルモンスターに負けたのは、どこのどいつだ！

「だったらお前は、一回も死んでないってのか」
「何十回も死んでるけど、それはただのゲームだったからいいの！」
「変わんねーって」
「変わってたらどうすんのよ！」

状況も忘れて「戻って！」「やだね」を繰り返していると、近くに複数の殺気を感じた。ああもう、邪魔！
「秘儀、ナントカ剣！」

瞬間移動と居合の合体技、抜く手も見せぬ強力連続攻撃である。
あたしは高速で敵の間を走り抜けた。
ネーミングは気にしないでほしい。

あたしたちの言い合いを同士討ち、隙だらけと思って攻撃してきた犯人達は全滅した。

ちなみに何人かいた魔法使いは、コウキがさくさく倒していた。
素早さをいかし、背後に回って延髄を一撃である。これでは、忍者でなく暗殺者だ。
あんた、ゲームだと思ってホント容赦ないね。

予想外にたくさんいた犯人グループ（生き残り）は、『キョウ』の奉行所に引き渡すことに決めた。
他に仲間がいないのを確認するついでに、隠れ家を吐かせた。いつからやっているか、なぜここに目をつけたかも聞いてみたら、犯人たちは裏設定までしゃべってくれた。

彼らは、春にマツタケ石（リグレ鉱石）を無断で採っていたのを新人森林官に見つかって、崖に突き落としていたのだ。
その時に森林官たちもリグレ鉱石も採取していると思い出し（副業として行政から許可がでている）、倉庫に忍び込んだ。幽霊騒ぎで人目につきやすくなってしまったが、泥棒と思われなかったので、ランダムに倉庫に潜入して漁ることにした。

そういう事件だった。

「……森林官たちが倉庫内を確認してたら済んだ話じゃない？」
「いえ、私たちでは返り討ちにあっていたかもしれませんわ。本当にありがとうございます」
『僕を殺した犯人も捕まえてくれましたし。感謝しています』

心残りもなくなり誤解も解けた幽霊は、きらきらした朝日を浴びて笑顔で成仏していった。
小人の娘さんには何度もお礼を言われて、朝ごはんとお弁当まで出してもらえた。

やったね。
クエスト成功。

＊

本日のクエスト【森の幽霊（推奨レベル１００～）】

新人森林官の幽霊を成仏させればクリア。

幽霊（ゴーストＬｖ７９）に攻撃すると反撃してくる。退治して終了した場
合報奨金５０万イェンだが、二日後、再びリグレ鉱石の消失が事件となる。
成仏しきれていないという事で、無償での強制クエスト。

リグレ鉱石泥棒（盗賊他Ｌｖ３０×４、Ｌｖ６８×６）を捕まえて終了の場合、
報奨金５０万イェン＋追加報酬１０万イェン、小人

のお弁当（Ｌｕｃ値＋１）

8月25日　3（後書き）

トモがコウキに手加減すると逃げられるようになったのは、一回コウキが死んだトラウマです。行動は乱暴でも、当てたくない気持ち。

なので、本当は他の人に対しては手加減攻撃できるんですけどね。

そのへん、トモは理解していません。

自分のことは見えないし分からないってヤツです、はい。

8月26日　コウキ視点

ゲームの世界に入り込むなんて、想像した事もなかった。
そんなのあるわけないとか言う以前に、部活しかしてこなかった。空想の入りこむ余地ナシ。
休み時間は、もっと青少年らしくくだらない話で盛り上がってるし。

だからこういうのは、どうしたらいいか分からない。
トモが毛を逆立てた猫みたいにみゃーみゃー騒いで動きまわってるから、それでようやく焦らずに済んでいる。
反面教師とか、任せきりとか、そういうんじゃなく。

トモって、見てると和むんだよなあ。

すぐ怒って物を投げて来るけど、それだって小動物が一生懸威嚇してるかんじで、おーよしよし頑張ってるなあと頬ずりしたくなる。じたばたされても、ますます可愛い。
ここに来て外見が古ツワモノ状態になってしまったが、声も行動もトモのままだから、まあ許せる範囲だ。

でも、できれば早く現実に帰りたい。
宿題はどうでもいいが、格闘雑誌の発売日が月末だ。
いっそ誰か、現実世界のオレを殴ってくれたら目が覚めないかな。

なんて思っているのに、トモはきゃんきゃん騒ぎながら便利屋(ぼうけんしゃ)を始めてしまった。
神経質なんだか図太いんだか、さっぱり分からん。

ともかく、街に着いて犯人を引き渡した。
森にすんでいる妖精（？）、超ミニサイズの女の子がくれたお弁当を食べ終わる頃には、午後になっていた。

「これからクエストするにも、半端な時間よね。防具屋にでも行ってみる？」

朝を待って犯人グループの隠れ家に踏み込んだら、まだ売っていなかったマツタケ石を押収できた。追加報酬がもらえたので、懐(ふところ)はあたたかい。
あまり気乗りしなかったが、トモが行く気満々なのでうなずく。

大通りには店が並んでいた。
たまに冒険者とすれ違うと、（おい、あいつ。一昨日騒いだヤツ）（ああ、あれ）とこそこそ囁(ささや)かれ距離をとられる。
うん。男として、近寄りたくない気持は分かる。

「トモ、こっちの店見ていいか？」
オレはすぐそこにあった店を示し、遠巻きに噂している一団を避けた。
トモはこれでも傷つきやすい。煙月斎(えんげつさい)として動いている時はそう

は思えないだろうが、現実だといろいろ考え込んでいる。

「えー、武器屋ー？　忍者用の買ったばっかりなのに」

「防具だってそうだろ」

不満げな彼女をなだめつつ引っぱりこんだ途端、中から出てきた女の子にぶつかられた。

「す、すみません」

「おう、別に」

彼女を避けて中に入ろうとしたら、トモが後ろでキャ――――っと歓声を上げた。

振り返ったら……隠居した柳生宗矩（やぎゅうむねのり）みたいな外見のジイさんが、両手を頬に当てて狂喜乱舞していた。

……ホント視覚の暴力だよな。

目を逸（そ）らしたい。

「淡路（あわじ）サマはっけーん！」

オレが何を思っているか知りようのないトモは、女の子の手を握って喜んでいる。

うーん、スケベジジイ以外の何物でもない。

「はじめまして、淡路サマ。あたし煙月斎です。こっちは……なんだっけ？」

このキャラクターの名前を求められているらしいので、ニザール

ですと答えておく。大昔の暗殺者集団の名だが、たぶん一般人には分かってもらえないと思う。

「何かお困りの事があったら協力します！　つか、させて下さい！」

好意の押し売りみたいなトモは、次いでオレの長い耳を引っぱり、他人の目の前で内緒話を始めた。

「このＮＰＣ（ひと）、ランダムに出現するの。捕まえられたら超ラッキー、すっごい報酬くれるクエストが発動するって話だから、逃がさないで」

煙月斎は守銭奴（しゅせんど）キャラなのか？

思ったものの、淡路サマという女の子がくすくす笑い始めたので訊けなかった。

「ごめんなさい、聞こえてしまって。煙月斎様って面白い方ね。でもわたくしはただの女房ですもの、そんな報酬は差し上げられませんわ」

女房って、この子人妻？

めちゃめちゃ若いだろ、ソレ犯罪。と思っていると、トモに足を踏まれた。

「京都御所に勤めてる女の人の事！」

……なぜここだけ分かるんだ？

テレパシーがあるなら、他の疑問にも答えて欲しい。

淡路サマはまた笑った。

高そうな着物姿で、片手に頭に乗せる笠を持っている。笠は半透

けの布がついていて、顔が分からないようになっているヤツだ。平安時代風？　なんにせよ、天皇に仕える人なので、偉いのだろう。

「あなたはわたくしを存じませんのね」

「冒険者になって三日目なんで」

ゲーム世界に来て三日目なんで、とは言わないでおく。

「まあ。では、それなりのお願いをしますわね。猫を捕まえて下さいます？」

瞬間、トモががくっと地面に両手をついた。

がりがりと床の土を掻いている。

猫の特徴と連絡先を言い終えた淡路サマが去ってしばらくすると、下から恨みのこもった声が響いて来た。

「コ～ウ～キ～。ナニ要らない事言ってんの～」

「何が？」

「高報酬イベントだって教えたじゃない！　あたしのレベルだったら４００倍スゴイのが来たのかもしれないのに！」

「でも４００倍難しいかもしれないぞ？」

オレは店の外へ出た。

トモの噂をしていた男たちはもういない。ほっとして来た道を戻り、脇道に入った。

「コウキったら、一人で行かないでよ」

「ん。すぐ済むから」

大通りから少し入った家の、開け放した窓に丸まっていた猫の首をつまみ上げる。猫は迷惑そうに一声鳴いたが、抱きかかえると大人しくなって顔をすりつけてきた。

へちゃっと潰れたブサカワの、長くて白い毛。その辺を歩いている野良ネコとは大違いの、外国原産種。

特徴は、探し猫と完全に一致した。

「話聞いた時、さっき見たなって思ったんだ。ほら、1レベル用だと簡単だろ？」

トモはまた、がっくりとしゃがみこんだ。なんなのそのラック値とか、ぶつぶつ呟(つぶや)いている。

彼女が立ち直るのを待っていたら、

「あァら、その猫あんたン家のだったのォ？」

家の住人が、うなじの遅れ毛をかき上げながら声をかけてきた。年増というか、熟女というか、そんな感じの美人である。

「見つかって良かったわねェ。そこでいつまでもアタシの三味線(しゃみせん)聴いてるからさ、そんなに好きなら楽器にしてやるって思ってたところよォ」

ケラケラ笑う女。

冗談には聞こえなかった。

探し猫の皮が三味線に加工されてしまう前に、オレはトモをひきずって退散する事にした。

＊

本日のクエスト【特殊イベント（レベル１～５０）：迷い猫を探せ】

帝の猫なので、御所付近にいることが多い。
時間が経つと三味線の師匠に捕まってしまうので、
その時はリタイア可。
ペナルティは無いが、以降淡路に会えなくなる。
成功報酬：１００万イェン。淡路との面識。

8月26日　コウキ視点（後書き）

現実では、トモがきゃんきゃん騒ぐ→コウキが微笑ましく見守る→「にこにこしてんじゃないわよ！」とトモがキレて文具を投げる、という日常です。

トモはツンデレ（デレ成分は極微）、コウキはおおらか大雑把なマッチョアスリート（暑苦しい筋肉ダルマ）を想像して下さい。そんな感じ。

8月27日　1

「昨日の借りをかえすわよ！　今日こそ高額報酬！」

あたしは右拳（みぎこぶし）をかかげて宣言した。

コウキが何ともいえない視線で見おろしてくる。

「前から思ってたんだけど、お前、いつの間に守銭奴（しゅせんど）キャラ？」

……いま、こめかみがピキッといった。青筋浮いた。

こいつホントにわかってない！

「誰のせいだと思ってんの？　あたしの今までの報酬、全額あんたの苦無（くない）につぎ込んだのを忘れたとは言わせない！」

苦無は、忍者が使う武器である。短剣として使うほか、投擲（なげこうげき）もできる。

先日、コウキはレベル無視で装備できる極上品を買った。

それはいいよ？　別にね、順番さえ守ってくれればあたしだって文句は言わない。

順番。

つまり、同じくレベル無視で着用できる忍び装束（しょうぞく）があったんだから、先にそっち買えよ！　いまだに防御力紙のくせに！

って事だ。

「人間、守りに回ったらお終いだ」

「お終いなのはあんたの人生っ！」

すべてがデータとして処理される世界で、人間の膨大な記憶や感情が完全に保存されるなんて不可能だ。どんなスパコンだって人間の思考や感情を再現できない以上、死んで甦(よみがえ)るたびに欠けてゆく物がありそうで怖い。

「その辺は気にすんなって」

ああもう信じらんない！

なんなのこの筋肉脳ミソ。万が一あたしを忘れたら、二百回くらい殺してやるからな！　覚悟して発言しろ！

あたしは物騒な決意を固めながら、掲示板を眺(なが)めた。

「トモ、おもしろいのがあるぞ」

相変わらずなコウキは、あたしの殺気に気付きもしないでクエストが書かれている紙をはがす。

個人の依頼で、一人では手に負えない調査を手伝って欲しいというものだ。報酬は応相談。必要なのは、探索のスキル。持ってるから大丈夫だけど、

「どこがおもしろいの？」

それが分からない。

「え、おもしろくない？」

逆に訊き返され、あたしは諦めた。コウキに理由とかきいてもムダだ。こいつは本能と感覚だけで生きている。

＊

書いてあった連絡先は、長屋の一部屋だった。

中流以下の人達が住んでいるところだ。だから掲示してから時間が経っているのに、誰も引き受けなかったのだ。相談というが、交渉できるほどのお金を持っているとは思えない。

簡単だったら引き受けてもいいけど、長引くのはヤだなあ。

あまり乗り気でないあたしだったが、仕事は仕事だ。障子（しょうじ）の向こうへ声をかける。

「こんにちはー。依頼を受けた冒険者ですがー」

とたんに腕をつかまれて引っぱりこまれた。

ぎゃー。ヘンタイに連れ込まれるー。乙女のぴーんち。

「……ひいっ」

引っぱりこんだ張本人はあたしに胸を踏まれてじたばたしたが、刀を突きつけると大人しくなった。

相手に肩から体当たりをして突き倒し、ひっくり返ったところを足で押さえつけ、抜く手も見せぬ早業で抜刀してみましたが、何か？

「拙者（せっしゃ）に何用だ」

久々に煙月斎（えんげつさい）のロープレもつけてみる。大サービスだ。

と、ぺしっと頭を叩かれた。
「ノリノリなところを邪魔して悪いけど、その人が依頼人じゃないのか？」
ガクガクと頭を上下させる中年男。
「そっか。冒険者頼んだの、ひとに見られたくなかっただけか。ごめんなさい」
足をどけて深々と謝ると、男はコウキの後ろに隠れた。
いや、ハーフエルフな外見は柔らかいけどさ。現実世界だとあたしよりそっちの方が強いよ？　今も必要なら、ＮＰＣくらいサクッとやっちゃうよ？
「トモが乱暴ですみませんねー」
「あ、いえ……。わたしも冒険者の方をあなどってました。まさか二丁目の剣士がいるとは」
「そこかい！」

ツッコミを入れたが、コウキと男は三和土（げんかん）から畳に移動して話を始めている。
仕方がないので、あたしも入口に腰かけた。
「改めて、はじめまして。わたしは井原余兵衛（いはらよへい）と申す者です。喧嘩（けんか）早さはともかく、腕も人格もよろしいかと思いました。お話させていただきます」
「一言多いわよ」
「それで依頼の内容ですが、他言無用にお願いしたいのです」

スルーするとは、実はおじさん大物だな？

8月27日　2

「依頼とは、桔梗屋（ききょうや）さんを探って欲しいというものでございます」
そう、中年男は言った。

話をまとめるとこんな感じだ。

井原というこの依頼人は、越後屋という呉服屋で働いている。桔梗屋というのは、ライバル店だ。
今まで萬里小路家（までのこうじけ）（公家）に着物を納めてきた城野（きのや）屋が失敗し、新しい呉服問（とりひきさき）屋を探している。商売繁盛、事業拡大の大チャンスである。

越後屋は桔梗屋に負けまいと、いい物をそろえて参上した。
しかし、選ばれなかった。
悔しくて、越後屋の主人は萬里小路家に喰い下がった。そして、もう一度だけなら品物を預かろうと言わせたのだ。

「わたしどもも全力で良い品を集めております。ですが、前回なぜ負けたのか分からないのですよ。華やかで、これ以上ない綾織りだったのですがねえ」
「だから桔梗屋を探れ、か。敵を知り、己を知れば百戦危うからずってことね」

ぱちんと、井原は何かを弾く動作をした。――――算盤（そろばん）だ。手のタコとあわせて、この男は越後屋の番頭なんだろうなと推測。
「ご明算にございます。さすが煙月斎様は物知りだ。きっとわたし

どもの知りたい事を教えてくれるでしょう」
彼は薄く笑った。
あ、なんかこいつ腹黒そう。
「……あんたたちの前に着物を納めてた城野屋の失敗って？」
「さて何でございましょうね」
自分たちで察しろってか。知っているのに知らないフリをするのは、情報を漏らしたくないからだ。さすが商人（あきんど）は手の内を見せたがらない。
「なるほどね。で、報酬は？」
「そうでございますねえ……」
値切るのか？　値切るんだな？
さっきからコウキは右に左に首を振り、あたしと井原を代わる代わる見ている。
井原は、人好きのする笑顔で彼へ笑いかけた。
「安心な方がいますのでね、裏切らないと思います」
「え？　クエストで寝返るのってありえないだろ」
甘い。どっちについてもいいクエストだってあるんだよ。
あたしと同じことを思った井原は、また算盤をはじく手つきをした。
「そう言っていただけるとありがたいですね。保証料こみで１０万でいかがでしょう」
「安っ」
気をもたせておいて、やっぱ値切ったよ。この男っ。

「交渉」スキル発動（ウソ。残念ながら持ってないので、自力）。
「５０万。あんた達にとって、公家との取引ってそんなものじゃないでしょ？」
「１５万で。内情を探っていただいても、直接役に立つとは限りません」
ああだこうだ言い合った末に、２２万で手を打った。

井原はクククと腹黒な笑みをもらした。満足気だ。
そりゃあんたはそうでしょうよ。くそう。高額報酬狙ってたのに。
「まあまあ。持って来ていただいた情報が使えるようであれば、追加報酬をお払いしますよ」

こうやって人をエサで釣るわけか。
足りない分を補えるほどの情報を求めさせるやり方は、費用対効果としていい策なのかもね。あたしは好きじゃないけど。

正式に依頼を受け、外へ出る。
誰もついて来ていないのを何度も確認する。

「トモ、何してんだ？」
「大店（おおだな）の番頭がひとりで交渉に来ると思わないから。誰か隠れてついて来てて、その人があたし達をつけてたら嫌じゃない」

コウキのおかげで、後をつけなくてもいいと判断されたみたいでラッキーでした。

ｉｎｔ値のせいで関口友より脳ミソ回らないけど、このくらいは考えるよ。うん。
安心して、駕籠（かご）かきの元締めのところへ行く。

「元締めー、通りで流してる駕籠じゃなくて、ここで一番上等なのを貸してー」
駕籠屋の奥に向かって叫べば、着物を着流した親分みたいなのが出てきた。渋めのイイ男だ。彼はキセルをぷかりと吹かすと言い放った。

「おネエのジジイとは、世も末だぜ」
そのネタ、もういいよ！

＊

客に向かって失礼な事を言いやがった駕籠屋の元締めは、悪い悪いと笑って料金をまけてくれた。融通（ゆうずう）のきくＮＰＣだった。

駕籠は、中からの許可を受けて御所へと入って行く。

ナゼ御所か。
答え。ゲームしながら攻略検索できない今、問題は根本から考えないと失敗するから。

特殊なのとか話題のクエストは覚えてるけど、こんなの答え知らないもん。

なので、考える。
依頼主である越後屋が桔梗屋を探るのは、萬里小路家に選ばれたいため。

だったら、萬里小路家がなにを基準に選んでいるかが一番大切なポイントだよね？

御簾（みす）で区切られた空間で待っていた淡路サマは、嫌な顔もせずお茶と茶菓子を勧めてくれた。

「昨日はありがとうございました。帝もたいそうお喜びでいらっしゃいましたわ」

こうやって見ると、長くつややかな黒髪もまっ白な肌も、本当に雅（みやび）だ。美人だ。生きてる人にしか思えなくて、なんか後ろめたい。

「こっちも、高額報酬ありがとう。忙しいのに来ちゃってごめんね。ちょっと聞きたい事があって」

「まあ、なんでしょう」

「萬里小路って知ってる？　お公家さんなんだけど」

訊（たず）ねると、淡路サマは意味ありげに微笑んだ。

「存じてますわ」

「どんな人？　噂話でいいから教えて欲しいんだ。呉服屋を取っかえ引っかえしてるみたいなんだけど……」

全部言い終わらないうちに、淡路サマは扇で顔を隠した。

声は押し殺しているが、なんか爆笑している。

「ご、ごめんなさい。あ、あの方……ぷぷっ」

公家↓　血筋のいいひと↓　御所勤めの淡路サマなら知ってるかな、くらいの感覚で聞き込みに来たんだけど、なんで吹くの？

気が済むまで笑った淡路サマは、真っ赤になった顔をパタパタあおいでいる。

「失礼しました。あのね、あの方、皇后さまに良く思っていただきたいの。皇后さまはお着物がお好きだから、反物をたくさん献上なさってるのよ」

つまり賄賂(わいろ)だな。

話が大きくなってきたから、もしかして貴族クエスト（高報酬）に発展する？

8月27日　2（後書き）

しません。

8月27日　3

でも、とあたしは首をかしげた。
「賄賂(わいろ)なら、どうして城野(きの)屋って呉服屋さんが取引中止になるの？」
淡路サマはまた笑いをこらえて扇の後ろに隠れた。
「すべて無駄だったからでしょう。たいそうな金額をお使いにならられて、結果はゼロ。腹立たしくもなるでしょうね。本当に、まったく、完全に無駄だったんですもの」

すっごい強調。
水の泡になった努力を高笑いする（ウソ。誇大表現）淡路(あわじ)サマって、実は女王サマですか。

あたしの視線を気にした淡路サマは、誤解よ誤解と手を振った。
「だって萬里小路(までのこうじ)様って、性格のよろしくない狒々（ひひ）ジジイなんですもの。あの方のせいで苦労している者はたくさんいます。この上皇后さまに取り入ろうなんて、なんて図々しい」
特殊イベントのＮＰＣに、ここまでミソクソに言われるヒトも珍しい。

「なるほどね。最初から望み薄なんだ」
「ええ。でも受け取らないのも角がたつでしょう。だから、趣味でない物だったから、ご自分の着物に仕立てようと思わなかったって事にして。皇后さま、いただいた物をご自身が後援されている孤児院に寄付していらっしゃるの」

そりゃ、贈った公家（くげ）にしたら腹立つだろうね。下民のために買ったのではなーい、とか言いそう。

納得したあたしは、最後に皇后の好みを聞いて御所を辞（じ）した。

「で、次は桔梗屋（ききょうや）？」

大通りで駕籠（かご）から降りると、コウキが目の前のでかい店を見上げた。

そのとおり、桔梗屋です。依頼人のライバル店。――――客多いな。

「お客さんで、できるだけお金持ちっぽい人を探して」

「あれなんかどう？」

コウキが指さした人が買い物を終えて出て来るのを待つ。そして頼む。

「じゃ、聞き込みして来て。桔梗屋さんの品ぞろえと内情。その繰り返し。がんばって」

ＴＶ『はじめてのおつかい』並みの指示なので、一人で任せる。

この状況だと数値が見えないから分かんないけど、コウキのキャラクター・ニザールって魅力も高いんじゃないかなあ。越後屋の井原の態度がそんな感じだった。

ハーフエルフなので、あり得る。逆に、力も耐久力もあるダーク

エルフは魅力が低めの設定で、クエストを受けられなかったり聞き込みで失敗することもある。

だったら聞き込みを任せてもいいよね。幸運と魅力のダブル攻撃なら、いいネタつかんでくるでしょう。

その間あたしは――――

＊

汚れ仕事でもしようかなっ、と。

ダン、と音を立てて日本刀が廃屋の壁に突き刺さった。

ひいっ、と悲鳴もあがった。

うらぶれた人気（ひとけ）のない場所で、あたしは桔梗屋から出てきた奉公人を脅していた。

「こここんな事をしてただで済むと思ってるんですか。奉行所に訴えますよ。うちの取引先に、はお公家様やお武家さまもいるんです。アンタのような者を死刑に処すなど簡単な」

「ここで死んじゃったら、言いつけるも何もないよね」

あたしは、追いつめられて壁にびったり張りついた奉公人に顔を寄せた。もちろん右手には、逆手（さかて）にもった日本刀。まだ抜いてない

ので、彼の顔のすぐ横に刺さったままデス。
悪役が町人を脅している場面を思い浮かべてくれれば、それが正解。
「かかかか金ですか」
「ハズレ。あんたが今まで見た桔梗屋の一番の物ってなにか教えて欲しいだけ」
「ななななぜそんな事を」
奉公人は、逆に質問してきたりでなかなか答えなかったが、最終的には吐いた。
しばらく前に、朱と金の絢爛豪華な西陣織が飾ってあったそうだ。タイミング的に萬里小路（までのこうじけ）家に献上したものに間違いない。
「そっか。ありがと」
あたしは反物（たんもの）の柄の細部まで聞くと、彼に多めの情報料を握らせた。
「ななななんで」
「タダで訊こうなんて思ってないもん。あんたが逃げるから、ちょっと手荒になっただけで」
「ちょっとじゃありませんよっ！　死ぬかと思ったじゃありませんか！」
「そうでもしなきゃ、しゃべってくれなかったじゃない」
ごめんねーと謝ると、奉公人はふてくされながら許してくれた。
「……しかたありません。同類のよしみです。アタシたち二丁目の住人に悪い人はいないもの。今回だけは信じてあげます」

死ね。

心の中で思ったものの、実行はせずにその場を離れた。

でもさー思うんだけどさー、女の子プレーヤーで男のアバター使ってる人なんて珍しくないよね？　こんな非常事態じゃなかったら、普通だよね？

夜時間を合わせてここで遊んでる友達だって、女の子だけど男キャラにしてる子もいる。

なんであたしだけ、こんなに言われなくちゃなんないの。

「トモ」

桔梗屋の近く、人目につかない場所で不機嫌に絵をかいていると、コウキが帰って来た。

「刑事は足で稼ぐってのは、本当だったんだな。客追いかけて、すっごい歩き回ったぞ。お前は何やってんの」

「萬里小路家に納められた反物の柄」

答えると、コウキは短時間でスゲエな、とほめてくれた。手段を訊かないあたりが素直だ。人を疑わないってイイ事だ。

あたしはその筋肉脳を愛してる。ウソじゃないよ？

すこしは気分が良くなって、あたしは落書きしていたメモ帳を四次元バックにしまいこんだ。二人で並んで歩く。

「オレの方は、桔梗屋がふだん扱ってる物がどんなか訊いて来た」

こまごまと内容を教えてくれるコウキ。中には、さっきの奉公人が言っていたのと同じ柄のを見たことがあるという証言もあって、あたしは感激した。

「みんな、品は良いけどとりたてて凄いものはないって言ってたぞ。公家と取引をはじめるかもって聞いてびっくりしてた」

「情報集まったね。コウキのｌｕｃ値のおかげで、裏付け調査しなくて済んで、助かったわ」

「……そこまでやる気だったのか」

あたしだってめんどくさいとは思うよ。でも。

「『桔梗屋、お主もワルよのう』って言うじゃない。情報自体がフェイクの可能性を疑わないと。黒い人はどこまでも黒いと決まってる」

「越後屋だろ、それ」

時代劇の定番セリフは、しかし微妙だ。越後屋は雇い主だ。聞かれでもしたら、怒られる。井原に報酬を値切られる！

そんな感じでけらけら騒ぎながら越後屋に向かっていると、斜め上から吹き矢が飛んできた。

居合抜きで叩き落とす！

大通りだったので、通行人がいっせいに悲鳴を上げた。慌てふためき、近場の店や路地に避難して行く。

その間も攻撃はやまない。あたしが連続で矢を落としている間に、コウキがあたしの四次元バッグに手を突っ込んだ。

と思うと、商家の屋根へと跳ぶ。あたしが追って跳躍するより早く、攻撃が分散された。

半分は屋根に乗ったコウキに向かう。

「ばかっ、危ないっ！」

なんで紙のくせにそういう事するわけ？

8月27日　4

爆音がして、あちこちで瓦(かわら)がふっとんだ。

コウキが、あたしの四次元カバンから取っていった発破(ダイナマイト)を投げたのだ。

屋根に穴が開く。直撃をうけた一人が絶命して落ちる。

足場を崩された覆面の男は飛びのいたが、遅い。

その先ではあたしの剣が一閃(いっせん)していた。

形勢不利とみた最後の一人が逃げようとするが、そうはさせない。屋根を走って追いかける。と、覆面野郎は反転した。フェイントですか、そうですか。負けないっつの。

手元で相手の剣を受ける。

マジで火花が散った。

鍔(つば)と鍔をぶつけて競(せ)り合う。あたしの方がレベルは上のはずだが、なにぶん態勢が悪い。上体が浮いている。

「すげー。なんど見ても、トモとは思えない動きだよなー」

ふっと、コウキが覆面野郎の後ろに湧いて出た。

振り切った手には、レベル無視装備の業(わざ)モノ苦無(くない)。

延髄を斬り断ったそれには、血さえついていない。

声にならない声を上げ、男は屋根から落ちた。

「ありがと」

「おう」

「でもね」

あたしはニッコリと地獄の微笑(ほほえみ)をうかべた。

「お、おう……？」

コウキは不穏な気配を察し、冷や汗をかきながらジリジリと下がってゆく。

「コレどうすんの！　どんだけ人ん家壊せば気が済むわけ？　こんなで弁償させられたらゲーム内で笑い者よ？」

「いや、だって『背景』壊れるって思わなくね？　それにトモが死ぬなって騒ぐから……」

「あたしのせい？」

ぎゃあぎゃあやっていると、下の道に岡っ引きや奉行所の侍が集

まって来た。
「そこな二人、市中を騒がす不届き者であるな。神妙にお縄につけい」
時代劇なセリフを吐いたのは、いかつい兜(かぶと)をかぶったオジサンである。おお、懐かしの映像番組で見たことあるっぽい。

あたしはコウキと顔を見合わせると、屋根にしゃがみこんで下を見おろした。
「あたし達が悪いんじゃありませーん。先にこの人たちが攻撃してきたんでーす」
「そうだとしても、狙われるその方達にも非はあろう」

ナニその理由。
痴漢にあった女の子に向かって、そのセリフ言ってみな。女子集団にフルボッコにされても文句は言えないって、分かってる？

あたしはフッと笑った。
「……ブラックトモ降臨……」
「コウキは黙ってて」
要らない事を言いだしそうな幼馴染に肘を入れてから、仕切り直す。

フッと笑う（そこからかい！）。
「あたし達、桔梗屋を調べてたの。嗅ぎまわられた直後に暗殺者を

よこすなんて、後ろ暗いことでもあるんじゃないのー？」

際立った品ぞろえでもない桔梗屋が、越後屋を押さえて萬里小路家に引き立てられたのには理由があるはずだ。

割引やプレゼント攻撃かと思ってたけど、ここまで強硬策をとってくるならもっと悪辣（あくらつ）な事をしているはず。

「そういうの無視してやるってんなら、いいわよ。壊れない『背景』が壊せたんだから、御所も奉行所も同じよね。トリップしたプレイヤーに不可能はない。レベル４０１のあたしがアイテム使い放題で暴れたらどうなるか、その身で体験してみればー？」

隣でコウキが「怒らせるな～」と奉行所のオジサンに手を合わせている。

失礼なヤツだな。

オジサンは冷や汗ダラダラでしばらく考えていたが、うむ、と虚勢をはってうなずいた。

「そ、そのような噂も耳に入っておる。その方達が嘘偽（うそいつわ）らずに話すなら、身を守っただけというのを信じよう」

ふふふ。勝った。

こういう駆け引きは得意なんだよワトソン君。先生やりこめる時とかね。

ｉｎｔ値の呪いのせいで不安だったけど、なんとかなって良かっ

た。

満面のスマイル。

コウキが隣で助かった～ってカオをしていたが、気付かないフリをしてあげた。

＊

包み隠さず証言し、あたしは奉行所を出た。

奉公人からの情報の件？

お金を払って情報を買いました、って以外の何があるかな？

どっちみち、あの人はしらばっくれると思う。自分が漏らしたなんて知れたら、桔梗屋に始末されそうだもん。

うん、本当にあそこまで問答無用でくるとは思わなかった。

暗殺者が動いたのは、コウキが無邪気に訊きまわってるのを見られたからだろう。

お客さんは秘密なんて知らないだろうから、純粋にあたし達に圧力をかけようとしたんだな。

（あたしは人の気配が分かるから、奉公人としゃべってたのを見られてない自信がある）

「桔梗屋って、裏で何してたんだ？」
コウキが腕組みして首をかしげる。
「知らない」
そこまで首を突っ込まなくても、奉行所が動いただけで充分な牽制になったはず。
「萬里小路家と癒着か？　でも思ったんだけどさ、あっちの公家もおかしくね？　普通ワイロを渡すなら、一番の権力者だろ。なんで奥さんなんだ？」
「天皇が奥さんにアタマ上がらないんじゃない？」
「うわ。国のトップでも尻に敷かれんのかー」
好き勝手いいつつ長屋で待っていると、依頼人の井原がやってきた。
実に幸せそうな、腹黒い表情をしている。
コウキはあたしをブラックとか言うけど、これには敵わない（と思う）。
ラフ画を渡し、桔梗屋が公家に渡した品を報告する。
コウキが聞きこんで来たこまごまとした内情とあわせて、仕事に漏れはない。井原は満足気にうなずいた。
「お疲れ様でございました。今日1日で成果を上げてくれるとは思

いませんでしたよ。では、とりきめた報酬と、これは追加です。おかげでうちが有利になりましたからね」

畳に置かれた箱は、二段重ねの上げ底仕様。お饅頭の下には、黄金色の食べられない饅頭が入っている。

お約束はカンペキだ。

「他に何かあれば聞きますが」

「特にないわ」

コウキが不思議そうにこっちを向いたが、無視する。

井原も彼の態度に何かあると思ったらしいが、2時間（！）ねばってもあたしが何も言わなかったので諦めた。

＊

予想外に井原が粘着質だったため、拠点に帰る頃には夜になっていた。

暗い道を二人で歩く。

こういうのは初めてだ。現実世界では、コウキは部活・あたしは塾で一緒に帰るなんてない。そもそも学年も学校も違うし。

「なんで守銭奴のくせに、皇后の趣味を教えなかったんだ。別料金でかなり踏んだくれたろ」

越後屋が前回用意した物は、豪華な綾織り。
皇后の趣味とぜーんぜん違う。
ワビサビな人なので、黒地に銀糸の刺繍が好きだと、淡路サマは言っていた。
「いいの。今回も派手目でいって、孤児院に渡されちゃえばいいのよ」
前も言ったと思うけど、追加報酬を求めてがんばらせる井原のやり方、あたしは好きじゃない。
結果がそうなのと、画策されてそうなったのでは大違いだ。
「鼻先にニンジンぶら下げらたら、誰でも走ると思わないでって事」
冒険者にもプライドはあるのだ。
だってあたしは今現在ここにいるんだもん。ゲームしながら、ネットで攻略見て一番効率のいい選択肢選ぶのとは違う。
むかついたら、相応に報復させていただきます。
コウキはにっと笑った。
「だよな。トモがトモのままで良かったよ。本気で守銭奴になったら、さすがに引く」
あたしは無言で足を蹴ってやった。
「言ってれば？　それにしても、ｌｕｃ値高そうだから、あんたの選んだのにしてみたけど、高額報酬じゃなかったなあ。どう考えて

も、このクエストがおもしろいって思えないし……」

答えを求めたのではなかったが、コウキが不思議そうにしているので、ため息をつきたくなる。

「コ・ウ・キ・が！　このクエスト引き受けようって言ったんじゃない。もう忘れたの？」

「オレ？　言ってないって」

きょとんとするハーフエルフ。

「今朝（けさ）言ったじゃない！　おもしろいって」

また蹴ろうとしたら身軽にかわされて、わたわたと手を振られた。

「ええっ、そういう意味じゃないって。おまえ勘違いしてる。トモ、依頼が書いてある紙持ってる？」

「これ？」

あたしが差し出すと、コウキはその一番下のすみを指さした。

「この染み、ドラえもんに見えない？」

「……はあっ？」

予想外のセリフに、用紙をまじまじと眺めてしまった。

ドラえもん？
どこが？
墨汁がとんで、丸が重なっただだろう！　どんな発想力だよ！
「こういうのって、おもしろくない？」
「……あんたってそういうヤツだよね……」
脱力した。掲示板の前でクエストの感想以外をつぶやかれるとは思わなかったよ。
もういい。温泉入って不貞寝してやる。

本日のクエスト【越後屋ｖｓ桔梗屋】
どちらに味方しても良い。期限内に、相手がどんな反物を
納めたのか調査できれば成功。報酬は交渉で決定。
相手問屋の罪を暴くと追加で５０万イェン。
皇后の好みを報告できれば、追加報酬１００万イェン。

8月29日　コウキ視点

ゲームは、興味があってもやるヒマがなかった。

でも本は、そもそも読む気がない。

小学校の朝ホームルームで、5分間読みましょうというのがあったけど、その時ですら山下泰裕（やましたやすゆき）の「黒帯にかけた青春」を眺めていた。

そう。眺めていただけ。

そんなオレだから、トモが夜中に「テンプレ展開なはずなのに、なんでこんな苦労……」とうなされている理由も、いまひとつ分からない。

テンプレ展開ってなに？

それ美味（うま）いの？

うなされついでに歯ぎしりが始まったので、オレはトモの頬をつついた。

歯ぎしりが止まる。

ほっとして寝ようとしたら、――――また始まった。

「……いくらなんでも迷惑だろ」

キョテンとトモが呼ぶこの宿泊施設では、低レベルの冒険者がたくさん雑魚寝（ざこね）している。だから合宿と同じで、共同生活なりの無言のルールがある。

寝相の悪さ・いびきの大きさは、ある程度なら無視されているが、安眠妨害のレベルになると布団巻きにされて外に放り出される。

トモも蹴り起こされても文句は言えないが、前科があるので誰も実行に移せないでいる。

近くの猫耳の女の子など、アバターの耳をぺったんこに押さえ丸まってた。眠いのに寝れないのはかわいそうだ。

オレはトモを起こそうと手を伸ばし――――

次の瞬間、半分だけ抜いた刀が首筋に当てられていた。

冷や汗たらーん。

「……ト、トモ……？」

「……」

トモはほとんど目が開いていない。もしかして寝ぼけてる？

「もしもーし？　幼馴染を斬り捨てるのはやめて欲しいんだけどー」

「……」

ぼーっとしたトモは、チャキと刀身を鞘(さや)にしまうと、
また寝た。
即寝。

「……」
そだな。こういうテンプレなら知っている。マンガであるし。
だから敢(あ)えてもう一度問おう！

テンプレって美味いの？

……オレはこんなしょっぱい展開は嫌です。

＊

「寝た気がしないー夢見が悪かったー」
朝になっても、トモの寝起きは悪かった。
配給毛布にくるまったまま、起きようともしない。

「じゃあ今日は休みにするか？」
無理にクエストをこなす必要はないので、オレが提案した時だった。

「あーんーたーはー」
「それは困る」
低音で響く怨念たっぷりの声と、軽い返事。
誰だ？　と振り返れば、きのう大岡越前（おおおかえちぜん）もどきと一緒にいた岡っ引きだった。
初めてリアルちょんまげを間近で見たな。
岡っ引きは、大部屋の窓から首を出した。
「親分が呼んでるんだ。悪いんだが、ちょっと付き合ってくんな」

「なによー、屋根の修理代は払ったじゃない。おかげでこっちは赤字なんだから。ああもう、思い出すだけで腹立つー」
毛布をはね飛ばして起き上がったトモは、腰に両手をあてて仁王立ちになった。
「聞こえた？　死んでも治んないどっかのバカのせいで赤字なの。休んでるヒマも、奉行所の呼び出しにつきあってるヒマもないの」
「でもさ、オレの防具を買うのは後でも平気だぞ？」
守銭奴（しゅせんど）の理由がコレだったのは、びっくりした。
トモがそんなに心配してるなんて思わなかった。
現実世界では平気でオレを盾にしてるくせに、そんなにこのアバターダメなのか？　背負い投げは無理にしても、動きが軽くていいんだけど。

「ぷにに負けたくせに」
「うわ、恥ずかしい。そんな冒険者いんのかよ」
「いて悪い？」
トモの冷たい視線に、岡っ引きは凍りついた。
「まあまあ、二人ともケンカはそれくらいにしろって」
仲裁しようとしたら、視線ビームがオレに向いた。
「だ・れ・の・せいだと思ってんの？」
はいオレです。
「でもさ、今日はまだ掲示板見にも行ってないし、義理通すくらいはいいんじゃね？　あの騒ぎ収めてくれたのは奉行所のオッサンなんだしさ」
吹っ飛ばした毛布を拾って渡すと、トモはしぶしぶ受け取ってたたんだ。
受け付けへと歩き出したオレを追い越し、毛布を返して外に出る。
窓から走って回ってきた岡っ引きに、びしりと指をつきつけた。
「しかたないから、行ってやるわよ。その代わり、時給制！　一時間以内に終わらなかったら、千イェン払ってもらうからね！」

……おまえ、守銭奴が板についてきたな。

奉行所で待っていたのは、越前似のオッサンじゃなかった。
別の、格下の侍だ。

「昨日の件だが、桔梗屋(ききょうや)のしわざであると確認がとれなんだ。ただし、その方らの言い分も信じるに足る。それで、じゃ。その方ら、己(おの)が無実を証明してみぬか」

「ふうん？　報酬、いくら」

「馬鹿を申すでない。その方らが有罪か無罪かという節目であろうに、何を」

侍はぎょっと目を剥いている。この時点でトモの勝ち。
オレは興味をなくして、奉行所内をぐるりと見まわした。

柱とふすまで区切られた部屋がたくさんつながっていて、外廊下(えんがわ)に出ると他の部屋の中まで見える。セキュリティとかプライバシーとか、いいのか？

あ、すげえ筋肉男を発見。
何やったらあんなになるんだろうな。

「無罪に決まってるじゃない。あたしたちは襲われた側、修理代も出した。それともナニ、あたしたちが襲った側だって証言でも出た？　構わないわよ。証言させてるのは桔梗屋でしょうから、ハナシつければいいだけの事」

話し合い（？）は続いているが、オレは部屋を出た。
岡っ引きは隣の部屋で、別の侍に質問を受けている最中なので、とめられなかった。

筋肉男がいた部屋をそっと覗きこむ。

男は即座にこっちを向いた。

「何用だ」

近くで見ると、さらに迫力だな。
しかも隣に細身の美女が座っているので、比較した分だけでかく感じる。

「職業、きいていい？　武道なにやってる人？　柔道できるなら、一回手合わせして欲しいんだけどダメか？」

男の眉間に縦ジワができた。

8月29日　2（前書き）

こんな辺境の初心者なのに読んでくださる方が増えて、嬉しい半面、心臓バクバク胃はチクチクです。
小心者なので、ハイ。

なのに、昨日は短かったりしてすみません。精進します。

8月29日　2

いちおう自分の無実もかかっているはずなのに、コウキはふらふら部屋を出て行った。
まあね、二人そろってれば昔からあたしが交渉係だったけどさ。

だからって、任せっぱなしで置いてくってどうなの。
あんたはいい歳して「待て」もできないのか？
うちの犬の方が２５６倍くらいちゃんとしてるよ！

「とにかく！　あたし達は都合よく使われる気はないの。これ以上いいがかりつけるなら、桔梗屋（ききょうや）の前にあんたを敵と見なすけど？」

物理攻撃が通らない巨大モンスター用に持っていた呪符（効果：火炎系爆発）を指に挟んでみせると、奉行所の侍はひるんだ。
ずさっと下がって、壁にはりつく。ぷるぷると首を振る。

イイ判断だ。
『背景』が壊れるなら、この建物だって壊れるだろう。
あたしだって、奉行所ぶっこわして凶悪犯を野に放すのは良心がとがめるし。

「以上。和解成立ね」

侍との駆け引きを一方的に終わらせて、あたしは廊下に出た。
もちろんコウキを探すためだが――――その必要はなかった。
コウキが目の前の中庭にふっ飛んで来た。
「？」
ぎょっとしている間に、ヤツは受け身をとって一回転。態勢を直すと同時に地面を蹴る。さすが忍者は身軽だ。廊下まで跳んだ次の瞬間には、跳躍の方向がすでに違かった。
仁王立ちになっていた大男につかみかかる。
現実世界のコウキより、一回り大きな筋肉ダルマだ。
装備ともいえない道着姿。自分の肉体だけが武器の格闘家だ。ただしＮＰＣ。
大男は瞬速でかかってきたコウキの襟を取ると、廊下に叩きつけた。
これも受け身をとって勢いを流したコウキが反転。三度（みたび）攻撃をしかけようとしていたので、あたしは小柄（こづか）（刀の横についているペーパーナイフみたいな物）を二人の間に投げつけてやった。
「奉行所でナニしてんのよ」
レベル４０１・煙月斎（えんげつさい）の３０％本気攻撃に、二人は左右に跳びの

いた。

空いたスペースにぶっすりと突き刺さる小柄。

「……」

「あー、悪かったけどさ……でも、一番危険度が高いのってトモじゃね……？」

冷や汗タラリで言われたが、無視する。

様子を見に追って来ていた侍が後ろでぎゃあぎゃあ騒いでいたが、そっちはあたしと目が合うと、そそくさと戻って行った。よくできました。

あたしは廊下をまわってコウキの前を通り越すと、大男を警戒しながら小柄を抜いた。

「うちのバカが何かした？」

相手は無言で見おろす。

かなりの圧力。でも威圧なら、関口友のときから屈したことはない。睨み返す。しかも煙月斎は、人間にしては魅力低めだ。どうだっ。

高まる緊張。

わかってないコウキが、悪気のない笑顔で、自分の顔の前でイヤイヤと手を振った。

「オレがちょっと手合わせを頼んだだけ」

ぷち、と忍耐力がキレた。

「あんたはっ、ホントに自分が耐久値紙って分かってるの？」

「ん。そこは男としてのサガで」

ああそうですか！

「もう死ね！　いっそ死んでしまえ。そんで草食系に生まれ変われ――――――――――っ！」

叫んで気が済んだあたしは、自分より高い位置にあるコウキの頭をぐいと下げさせた。

「ご迷惑おかけしました」

もちろんあたしもゴメンナサイする。

「いいえ。カヲルと遊んでくれてありがとう。この子、私の警護ばかりだから、こうやって話しかけてくれるお友達もいなくて。とても嬉しかったわ」

廊下に面した部屋で、中にいた美人さんが優雅に笑った。

紅を塗った小さな唇にあてた指先までが、画のポーズみたいに決まっている。

うわ、リアルに美人。

現実（リアル）じゃないけど。

けど一言いい？
カヲルって大男、遊んでなかったよ？　かなり本気だったよ？

あたしの表情を読んだ大男は、うっそりと頷いた。
同意ありがとう。しかし気付かない美人さんは、楽しそうに続ける。

「カヲルを怖がらないのは冒険者くらい。でも冒険者は、店に来てくれても、用が済むとすぐ出て行ってしまうからお友達になれないのよね。ねえ、あなた方は忙しくないみたいだし、私の用が済むまで、カヲルと遊んであげてくれない？」

「おう！」
遊ぶ＝手合わせなので、コウキが即座にうなずいた。懲（こ）りない男だ。

美人さんは、やがて侍の案内で部屋を出て行った。
大男は美人さんの言いつけに従って組手の相手をつとめているが、殺意もない稽古状態なので、あたしも気にしない。

「美人さんの用って何か訊いてもいい？　もしあたし達みたいにイチャモンつけられてるなら、お詫びに手伝うけど」

廊下に座り、中庭へと問いかける。

「心配は無用だ。伊織（いおり）様は奉行所に乞われて、真相を教えに参っている。お前たちこそ、無実なら伊織様に力添えを願うがよかろう」

中庭では、大男が手技が繰り出されかけ、払われ、の繰り返しが行われている。現実ならともかく、ハーフエルフな今は体格が違すぎるので、そうなった。

手だけの攻防とはいえ、双方動き回るので砂埃（すなぼこり）がハンパない。

「伊織って、もしかして占い師の？」

それなら知ってる。

『キョウ』の街に店を構える百発百中のＮＰＣ占い師だ。

そういえば、朝廷や奉行所にも力を貸してるって設定だった。

ありがち箔つけ設定だからスルーしてたけど、実際だとこうなるんだ。

意外というか、新鮮というか。

今まで、レアアイテム落とすモンスターの出現場所を教えてくれる便利人としか思ってなかったよ。

ゴメン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4084y/

テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

2011年11月29日17時49分発行